

我がたによるとなくなるみよしの、たのむのかりをいつかわすれん

〔古今和歌集秋〕はつかりをよめる

在原元方

待人にあらぬ物からはつ雁のけさなくこゑのめづらしき哉

題をらす

よみ人をらす

春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧の上に

〔後撰和歌集秋〕題をらす

よみ人をらす

行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりくゝとなく

〔枕草子〕鳥は

かりのこゑは、とをくきこえたるあはれなり

〔金槐和歌集〕まな板といふもの、上に雁をあらぬさまにして、置たるを見てよめる

あはれなる雲ゐのよそに行雁のかゝる姿に成ぬと思へば

〔採藥使記〕上奥州重康曰、奥州ソトガ濱アタリニハ、毎年秋雁ノ來ル比、此所ニテ羽ヲヤスマ、嘴ニ一

尺計ノ木ノ枝ヲ含ミ來ルヲ捨テ置キ、又南方へ飛去ル、來春歸ル頃、捨置キタル木ヲ又一本ツ、

フクミ北海へ歸ル、然レドモ歸ル鴈ハ稀ニシテ、右ノ木枝殘レル數ヲ、シ、彼所ノナラハシニテ、

件ノ木枝ヲトリ聚メ、風呂ヲ燒キ諸人ニ浴ミサセシム、他國ニテ多ク人ノ爲ニ捕レタル雁ノ、供

養ナル由、每春ノ例トセリ、是ヲ俗ニ外ガ濱ノ雁風呂湯ト云

光生按ズルニ、求林齋ノ性異辨斷ニ曰、日本渡海ノ唐人語テ云フ、唐土ノ北方山西國ノ北邊ニ、

毎年鴻雁ノ來レル時、枯木ノ細枝ヲ嘴ニクハヘタルヲ落ス所アリ、土人ソノ枝ヲ集メテ薪ニ

賣ル者アリ、其値毎年白銀五萬兩ニ及ベリト云フ

〔北越雪譜〕初編地雁の總立